

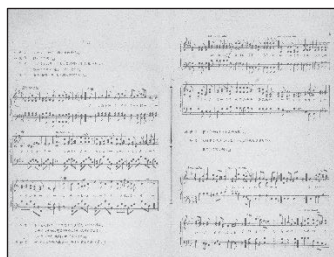
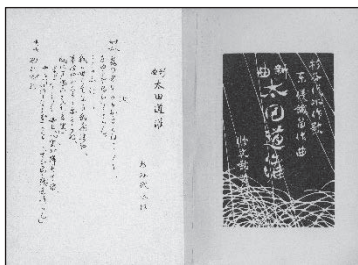
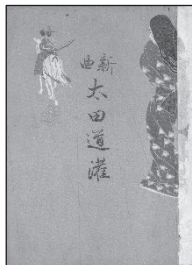
しんきょくおおたどうかん

#24 新曲太田道灌

作歌：杉谷虎蔵（すぎたに・とらぞう 1874-1915）

作曲：東儀季治（とうぎ・すえはる 1869-1925）

刊行：明治39年（1906）



※左より、表紙、歌詞、楽譜



♪ 解題

■ 内容

にわか雨にあい、蓑を借りようと道灌が農家に立ち寄ったところ、少女が出てきて山吹の一枝を捧げた。道灌はその意味がわからずにいたが、これは「七重八重 花は咲けども 山吹の 実のひとつだに なきぞ悲しき」（『後拾遺和歌集』兼明親王作）になぞらえたもので、蓑のひとつさえ持てない悲しさを山吹の枝に託したのだと家臣から聞かされる。自分の無学を恥じた道灌はそれ以降歌道に精進したといわれる「山吹の里」の伝説（「肘笠雨の伝説」）が題材となっている。

冊子は、右開きの歌詞の部分と左開きの楽譜の部分が合わされたつくりのものである。歌詞の部分の後には作者の補足が、巻末には編者による「例言」がそれぞれ掲載されている。

「例言」には、この歌は、倫理、歴史、国語などの教材を元にした簡単な唱歌劇もしくは朗読劇を作って、豊かな情を育むことに貢献する試みとして作られたことが記載されている。また、本劇の主体はあくまで歌であり、台

詞やしぐさは能楽や歌舞伎のようにならず、簡朴で優雅に、そして自然に行うべきことも書かれている。そのほかにも、曲中での演者の待機法から演奏の注意点に至るまで細かく指示されている。また、場面と共に独唱や合唱も織り交ぜられ、「唱歌」というよりは「歌劇」である。

当館では、本書のほかに、『大日本偉人唱歌集』に文学博士佐佐木信綱作歌の「太田道灌」が収録されている。こちらも「山吹の里」（「肘笠雨の伝説」）が題材とされた唱歌ではあるが、本作品とは全くの別物である。

■ 作者

東儀季治は俳優、雅楽師であり、「東儀鉄笛（とうぎ・てってき）」の名でも活躍した。宮中楽人の家柄に生まれ、宮内省雅楽部で雅楽と共に洋楽も積極的に修めた。東京専門学校（現・早稲田大学）に在学し、坪内逍遙に師事。輪唱唱歌「来れよ来れ」などを作曲した。明治39年（1906）「文芸協会」の設立に加わり、演劇改良運動に挺身。協会の幹部俳優として「ベニスの商人」のシャイロック役などで好評を博した。昭和14年（1939）オペラ「常闇」を作曲。歌劇の世界にも身を投じた。また、早稲田大学校歌「都の西北」を作曲、活気に満ちた旋律は、校歌・寮歌作曲のさきがけを成した。晩年は日本音楽史の研究に没頭し、「日本音楽史考」（未完）を雑誌『音楽界』に連載した。

杉谷虎蔵は、詩人、劇作家、翻訳家。鳥取県出身。杉谷代水（すぎたに・だいつい 1874-1915）の名でも活躍した。明治31年（1898）坪内逍遙の推薦で富山房に入り、逍遙監修の『尋常小学校用国語読本』、『高等小学校用国語読本』の編集に携わった。また「熊野」「小督」「太田道灌」など、新体詩や歌劇、狂言を書き、文部省唱歌「星の界（よ）」などの唱歌も60編余を作詞した。また、アミーチスの「クオーレ」中の一編を「母を尋ねて三千里」のタイトルで翻訳もした。

■ 太田道灌と伊勢原

太田資清の子として、永享4年（1432）相模国で生まれた道灌は、扇谷上杉家に仕えた戦国武将。江戸城を築いたことでも知られ、築城の大家であり、軍法の師範とも称せられた。また、和漢の学を修めるも特に和歌に秀で、江

戸城で詩や歌の会を開くなど文化的な面でも足跡を残し、文武両道を備えた武将であった。

文明 18 年（1486）、道灌は讒言によって主君上杉定正に糟屋館（現・伊勢原市）で暗殺され、悲運の最期を遂げた。道灌の活躍で扇谷上杉氏の勢力が強大になることを恐れた山内上杉顕定が、定正に「道灌に謀叛の心あり」と讒言し、定正がそれを真に受けたことによると言われている。墓は伊勢原市上糟屋の洞昌院内にある。なお、伊勢原市では道灌を偲んで毎年「伊勢原観光道灌まつり」が開催されている。

♪ 類似の唱歌集

- ・『大日本偉人唱歌集』教育音楽協会編 開発社 1916 [SH767.7/102]

♪ 参考文献

- ・『日本の作曲家』日外アソシエーツ 2008 [760.33/17]
- ・『〈図説〉太田道灌：江戸東京を切り開いた悲劇の名将』黒田基樹著 戎光祥出版 2009 [K28/387]
- ・『県民なら知っておきたい神奈川が誇る歴史人』中村秋日子著 TOブックス 2015 [K28/445]
- ・杉谷代水／とりネット／鳥取県公式サイト
<https://www.pref.tottori.lg.jp/89662.htm>
- ・神奈川県伊勢原市ホームページ 伊勢原観光道灌まつり
<https://www.city.isehara.kanagawa.jp/dokan-fes/>